2008. 8. 22

言葉の眼差し３～ ウェーベルン「管弦楽のためのパッサカリア」

言葉という表現手段は、同時に感覚器官でもある。さらにはまた思考手段でもある。我々人間が作り出した、複雑な機能を持った道具。それが今、うち棄てられ、踏みにじられている。音楽や映像、さらには「情報」という巨大な塵の洪水に満ちた大気が、我々を溺れさせ、言葉を忘却の川に溶脱させてしまっている。

それだけでなく、言葉や文字は、企業的な、あるいは個人的なコマーシャリズムの手段として、いわば、音楽や映像と同列の、単なる複数の意味を有する「記号」となっている。
そして、言葉という道具を喪失してしまった我々は、「想像力」という、人間固有の優れた能力をも喪失しつつある。

それは、産業革命以来、頭脳を便りに進めてきた、科学技術による生産機能の代替、そして遂には情報処理技術の進歩によって、ＣＰＵという外部頭脳への委託による思考機能の代替によってもたらされた、皮肉にも当然の帰結なのだ。

しかも、このＣＰＵは、高度な処理を行うのみならず、人間の意志とは関わりなく、次々と、どうでもいいような撹乱生命体を生み出している。
それは、コンピューターゲームであったり、釣りでいう「コマセ」のような、コミュニケーションツールであったりする。
もはや、我々の意思とは無関係に、独立した生命体となって暴走を始めている。そのことに、我々はまだ本当には気付いていない。既に、これは「現在」であって、サイエンスファンタジーではないのだ。

ある時から、僕の中で、言葉は、それらＣＰＵのきらびやかな衣装である、音楽や映像に背を向けた。それまでは、羨望の、憧れの、あるいは嫉妬の眼差しを投げていた彼は、溺れかかっている自分に気付いた。それと同時に、洪水のように押し寄せてくるそいつらが、全く「自由」を持ち合わせていない、単なる奴隷となっていることに、彼は気付いたのだ。
それは、人類自身が溺れかかっていることにも通じている、ということにも・・・。

この曲には、むせ返るようなロマンがあるように聞こえるけれど、既に自由を喪失し、その音の向こう側には何もない。